

BOOK GUIDE

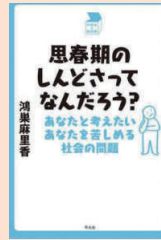
今月のブックガイド

子どものしんどさを生み出す おとなと社会

「思春期のしんどさ」という文字だけで、かつての息苦しく、窮屈だった思いがよみがえる大人は少なくはないのではないか。もちろん、部活動に明け暮れ、友人と笑い合い、恋愛に夢中になった日々もあるだろうが、そこにはつねに理不尽なルールや威圧的な大人の態度、つかの間の息抜きに救われるほどの閉塞感、性に対するうしろめたさや罪悪感があったように思う。ほんの少し前まで思春期を生きていた大学の学生たちにして、当時の日常がしばしば「黒歴史」と表現されるように、実は、多くの人にとって思春期は「暗黒」の時期なのだ。自意識過剰さへの恥だけでなく、生々しい生きづらさを思い出したくないからではないか。

スクールソーシャルワーカー（SSW）として子どもや教員、保護者と関わりながら、女性や子どもの相談を受け、こども食堂などの「居場所」づくりをしている著者は、子どもたちにこう語りかける。「思春期のしんどさ」は、「思春期のせい」ではない。「世の中の仕組み（環境や構造）」に原因がある、と。子どもたちの苦しみや行動は「思春期だから」とみなされやすい。しかし、思春期のせいになると、問題が「その子自身のなかにある」ことになる、と著者は指摘する。実際には、それは「世の中のせい」なのだ。家庭や学校、地域における「大人が決めた正しさの枠」、合理的に説明できない「規則」、自発的に参加すべき活動への「強制」、性にかんする教育がないうえに「男女の決めつけ」が根強いことなど。

こうした苦しみの〈理由〉を一つひとついねいに取り上げ、管理的な社会や学校の価値観、ジェンダー規範やホモソーシャルによる「性的な加害性」、虐待やいじめによる被害者への影響など、子どもを苦しめるものの〈正体〉を明らかにしていく本書は、子ども



思春期のしんどさって なんだろう？

あなたと考えたいあなたを苦しめる社会の問題

鴻巣麻里香著

平凡社

定価 1760 円（税込）

に寄り添うサポーターティブな内容であるだけでなく、ソーシャルワークの視点を子どもと共有するものでもある。ソーシャルワークは社会を変え、社会とつながる学問である。SSW である著者から子どもに届けられた視点は、子どもの成長と回復につながるだろう。これは新しい支援のアプローチといえる。それは、いじめや不登校、虐待、ヤングケアラーといった問題に対する「かわいそう」「えらい」といった大人や社会のまなざしこそが子どもの自尊心を傷つけ、子どもを追いつめると指摘し、一貫して子どもの権利の観点から「世の中の仕組み」を問い続ける姿勢にも表れている。

「世の中のせいにしてもなにも変わらない」と、大人は子どもに教え諭す。しかし、著者は「世の中のせい」にしないと世の中を変えることはできない、と反論する。そして、そんな世の中を変えていきたい、と。まさに変えるべきは「世の中」であり、変わるべきは「大人」にほかならない。

「なにも変わらない」という大人の無力感を掘り下げれば、かつて思春期を生きたわたしたちもまた「世の中の仕組み」に傷つけられてきたと認識せざるを得ない。「なにも変わらない」とあきらめてしまったことで、暴力やジェンダー不平等、自己犠牲といった社会の問題を次世代に持ち越してしまった。

子どもとの対話形式でつづられる本書は、子どもの立場にたちながら、子どもの権利についてわかりやすく説明されており、幅広い年齢の子どもに読まれてほしい。同時に、これは大人社会への痛烈な異議申し立てであり、まさに大人が読むべき本である。わたし自身、子どもに押しつけている「決まりごと」に慣れすぎて鈍感になっていたことに気づかされた。そして、かつて思春期を生きたわたしの苦しみが癒されていくようにも感じられた。苦しみの〈理由〉を知ることは、年齢を問わず、エンパワメントにつながるはずだ。

（大阪大学大学院教授 野坂祐子）